

1920～30年代台湾における結婚／恋愛小説について

大西 仁

はじめに

巫永福¹⁾の処女作『首と体』²⁾は、東京留学中の二人の台湾人学生の日を描いた小品である。語り手の「私」は、一昨日から自分の下宿に泊まる同郷の親友Sとともに大学の授業に出たのち、帝国ホテルで「桜の園」を観劇、神保町のモーリで夕食をとる。九段、日比谷、神田と、帝都の中心部を絶えず移動するこの作品を特徴づけるのは、獅子と羊のイメージの、繰り返しの想起である。「私」が偕行社の壁に見た彫刻の獅子と、日比谷公園の洗面所で出くわした羊頭は彼を悩ませ、末尾での「獅子の頭を持つた羊の体、獅子の体に羊の頭をくつつけた二匹の怪獣」の連想に至る。これを、台湾からの留学生の、植民地と宗主国、あるいは台湾の伝統社会と近代都市東京との間で分裂し、葛藤するアイデンティティの象徴だと捉えるのは妥当だと思われるが、おそらくそのことと密接に関係して、小説の雰囲気を決定づけているのは、両親から帰郷を促されているSの懊悩と、友人との別離が迫る寂寥感である。

私共は近日中に別れなければならぬと私は思つて居るが彼は別れたくないと考へて居るのだ、首と體の相反した対立である、何故なら彼は東京に居たいと願ひ、彼の家では彼の體を要求して居るからだ「帰郷せよ」とは屢々彼の家から手紙で要求して居る。その原因はと言へば重大なる結婚問題である。それで彼は東京に居たいと考へて居る。

当時の台湾の婚姻の慣習に照らせば、「重大なる結婚問題」が、故郷の父母がSの承諾なしに取り決めた婚約に起因することは容易に想像できる。父母思いのSには東京に恋人がおり、これによって、「孝と愛の衝突」に直面する。Sは、この問題を「解決」するために帰郷を決意するが、「父母の意志に従ひながら私の意志を通」すことはそれ自体が矛盾しており、また、Sが「父母の心を反映」し易いことを知る「私」は、彼が郷里での結婚を拒絶できないであろうことを見通している。

Sの東京での恋愛について、「私」は多くを語ることはなく、例えば、Sの恋人が台湾人であるか内地人であるかも知ることができないが、留學生活が切断される苦悩の中心に、恋愛があることは間違いない。台湾では、1920年代初めから一貫して文学作品のなかで「結婚」・「恋愛」が問題化されてきた。媒酌婚制度への抵抗、嫁ぎ先で辛酸をなめる妻、聘金をめぐる悲喜劇、実質的な一夫多妻、本島人と内地人の関係、童養媳³⁾、農村での姦通など、それは多岐にわたっている。特に「家に決められた結婚」に対する抵抗は、台湾の結婚制度への直接的批判ともなり、同時に台湾の地方性を絶えず再確認するための重要なテーマとなったと思われる。本稿では、「結

婚への抵抗」をストーリーの主な要素とする、1920年代から30年代にかけて発表された、台湾人作家による小説を取り上げ、1930年代の「個人の解放」を発想する形式を概観することを目的とする。

1. 恋愛至上主義の謳歌 - 『彼女は何処へ』

台湾新文学運動の最も早い時期に日本語で書かれた追風⁴⁾の「彼女は何処へ」⁵⁾では、「家」の間で決められた婚約と、自由恋愛による結婚が衝突した結果、自由恋愛が優先される。主人公桂花は、親の取り決めで従兄の友人清風と婚約、東京留学中の彼の帰りを待ち焦がれていた。しかし、この婚約は清風の知らぬ間に結ばれたもので、彼の帰台は二年前に（おそらく東京で）知り合った恋人阿蓮を伴っていた。清風は桂花の心中を思い苦慮するが、自由恋愛を貫いて阿蓮と結婚する気持ちは変わらなかった。婚約を破棄された（それは同時に失恋でもあった）桂花は、失意のなか東京への留学を決意し、日本に向かう船中で知り合った女性とともに台湾女性の解放を目指す。

主人公が失恋を経験しつつ自由恋愛を謳う、この小説が提起する問題が、台湾の婚姻制度／家の束縛からの「個人の解放」であることは明らかだ。清風が阿蓮との結婚を優先させる根拠は、それが彼ら自身の意志によるということにあり、その意味で、彼の承諾なしに「家」の間で結ばれた桂花との婚約は、受け入れることができないものであった。清風は、阿蓮との会話の中で、自由恋愛を貫く意義について次のように語る。

彼女（桂花）は苦しいに相違ない、私達だつて苦しいのです。それは私達の結婚制度に崇られたからです。私共は今此を破壊すべき時に達してゐるのです。世の中に私達と同じ境遇に泣いてゐるものは決して一人や二人ではないのだ。私共は今我が社会制度に革命の烽火を挙げなくてはならぬのだ。

ここには、自分たちの自由恋愛が、そのまま台湾全体の結婚制度、あるいは家族制度への改革に結びつくという確信がある。桂花も、破約を清風の責任に帰すことなく、「全く社会制度」、「媒酌制度」、「家庭専制」の罪であると述べ、彼女と同様の境遇にある台湾女性のために戦う意志を示している。ここでは、自由恋愛は、「結婚制度」「社会制度」への「革命」として価値づけられている。

張文薫氏は、この小説には自由恋愛の実践において現実との対峙が描かれていない点を指摘しているが、それをまとめると、以下ようになる。まず、登場人物の洒落た台詞や、「作品に描かれた台北市内のデートスポット、お似合いの恋人達、物分かりの良い周囲の態度」などが、当時の台湾社会には存在しない「恋愛」の理想形式、「則ち〈恋愛パターン〉の具象化」であること。次に、桂花の周囲には母と従兄の草池がいるのみで、父親が不在であることから、ここに描かれた「恋愛」が理想に留まり、「伝統社会の代弁者である家長の見解などといった具体的な問題」が排除されていること。三点目は、「恋愛」とは内地滞在中の留学生により実践されたものであり、「外地」台湾にいる少女にとっては「受容」するべき理念として描かれていること⁶⁾。

一点目に関しては、例えば、桂花の母は男女交際に理解ある女性として描かれており、「青年男女を結婚迄に相互理解をさせて置きたいといふ願望」ゆえに、母と草池同伴での桂花と清風の婚前デートを計画している。二点目は清風に関しても同様で、彼と、両親や縁者・仲介者との間で起こったであろう対立や、その対立の中で阿蘭との自由結婚をどのように行ったのかといった具体的な説明は省略されている。

このことと、彼らの自由恋愛が留学先で行なわれていることは不可分であると考えてよい。唯一、清風の心配として語られるのが、婿側から婚約を破棄された桂花が世間から攻撃を受けることであった。小説は、新聞に掲載された桂花への中傷と、それに対する清風の反論の記事で終わるが、上京してすでに4ヶ月になる彼女は、母から送られたその記事を目にしても「小さい事」と意に介さず、「彼女の頭には今もつと大きい問題が解決を待つてゐる」た。桂花が中傷に傷つかなくて済むのは、彼女が台湾社会から遠く離れた東京に居るからにほかならない。総督府の調べでは、日本に留学する台湾人は、1915年の300名から、1922年には2400人に激増している⁷⁾。六三法撤廃運動や台湾議会設置請願運動の担い手はここから出てくるわけだが、また、エレン・ケイ、厨川白村らの著述の受容から、恋愛・結婚論への関心も高まった。『台湾』には、この小説の連載第二回目の末尾に接して「滑稽問答」なる一問一答形式の戯文が載せられている⁸⁾が、「留学生第一生命」の問いに「自由恋愛新生活」と答えがあるのは、「自由恋愛」が留学生の専有物であるとみなされていたことと、それに対する諧謔的視点が存在していたことを端的に語る。

1930年以後、恋愛・結婚に関する苦悩が次々と描かれることになるが、それらの小説において、『彼女は何処へ』のように、自由恋愛・自由結婚が無条件で人間の解放を意味する視点は、ほぼ消失してゆく。

2. 理想の女性とはだれか - 「龍」

『首と体』と同じ『フォルモサ』創刊号に掲載された吳天賞⁹⁾の『龍』¹⁰⁾は、媒酌婚を拒絶する男を主人公に据えた、「彼女は何処へ」に対する十年後の回答に見立てることもできる小説である。主人公の「龍」は、古い港町鹿港で生まれ、「斯うした街特有の陋固な因襲の中に育った頭のいい思索肌の青年」であるが、恋愛至上主義的信念により、幼いころから約束のあった許嫁を見棄てたことで周囲から疎外されている。暗澹とした様子で龍のもとを訪ねた許嫁に対し、彼は「君を自分が憧憬するやうな品性の女にしようと思つて、今までに出来るだけの事を尽して見」たが、「心から君を迎へたい気持ちには何うしてもなれない」という。この宣告を受け、許嫁は死を決意する。龍の自由恋愛の信念を支えたのは、「自己の属している民族を、その無智から救ひたいという理想」であったが、「確固とした自分故の他人の死を突き付けられ」た龍は、許嫁を見殺しにすることができず、彼女と結婚した末、二人で入水自殺する。

悲劇的な結末を迎える本作は、台湾における自由恋愛の不可能性を印象づけるものとなっているが、恋愛至上主義を貫いて婚約を拒否するというストーリー、主人公が恋愛の価値を社会改革に置いている点、許嫁を「棄てる」にあたって「家」や「父権」との対決がないこと（龍は父母を亡くしており、両親の不在が婚約者の拒否を可能にしたと考えられる）など、「彼女は

何処へ」と共有する特徴を見つけることができる。

だが、二つの小説の間の相違を生み出すのは、拒絶される女性の性格付けである。内地留学して社会運動に身を投じようとした桂花と異なり、龍の婚約者は、「愛すことができない」という理由を聞かされて反発することもなく、「一凶に彼の妻として、彼の生活圏内で生を享受したい」という願望を持ち続ける。

「龍さん、棄てないで下さい」

彼女の声は顫へて微かであつたが、嘗てない勇敢さであつた。それは彼女の魂の奥底から込上つた全生命の叫びであり、彼女の絶体絶命の最後の溜息でもあつた。龍は恰も物凄いい鉄槌で頑とどやされたかのやうに、息が切れた思ひであつた。

彼女が龍からの拒絶を招いたのは、彼女の従属性ゆえである。だが同時に、その従属性を一貫させることで、彼を屈服させる力を持つに至った。言いかえれば、ここで、「理念としての自由恋愛」は、「因襲」に敗北したわけである。

さらに、恋愛至上を謂いながら、龍に恋愛対象となる女性がないことにも注目しておきたい。彼が「憧憬するやうな女性」に具体像が伴わないことは、彼が留学体験を持たないこと、彼の自由恋愛が「理念」に過ぎないことを語っているが、この空白に「理想像としての内地人女性」を置くことも可能ではないか。

植民地期の朝鮮に関しては、南富鎮が、「日本女性への憧憬を持つ膨大な小説が書かれた」ことに注目し、それらが、「たんに国策的な強要によって内鮮恋愛を描くのではなく、日本女性への憧憬は国策以前に大衆的な欲望として、植民地にあふれていた」¹¹⁾とする。台湾で日本女性への憧憬が「大衆的な欲望」であったのかどうかは、この時期の映画や流行歌などを通して検討する必要があるが、台湾人男性が日本女性を恋愛・あるいは欲望の対象としたことは、例えば、張文環の『父の要求』(1935)¹²⁾、『憂鬱な詩人』(1940)¹³⁾の二作や、翁闈の『残雪』(1935)¹⁴⁾など、いくつかの小説に見ることができる。『首と体』でSの恋人について語られることがないことは前述したが、「私」が、「彼の恋人の面影そつくりの麗人」の笑顔の、美松百貨店の着物地の広告写真を思い浮かべるくだりから、Sの恋愛対象を日本人だと考えることが可能である。

洪郁如は、日本に招かれた士紳たちが、内地で見る活動的な女性たちを妻にめとることを望んだ例を挙げており¹⁵⁾、台湾女性の「近代化」していく上での理想像となったことを指摘しているが、だとすれば、台湾で主張された「自由恋愛／自由結婚」は、単に日本あるいは大陸からの思想の移入の結果として見るばかりではなく、植民地-被植民地の関係の根幹から生まれてきたと考えることができよう。

3. 終わりなき過渡期 - 「争へぬ運命」

ここまで取り上げてきた小説では、自由恋愛を理想とした登場人物たちは、「家」との対決を避けてきたが、1933年に『台湾新民報』に連載された林輝焜¹⁶⁾の『争へぬ運命』¹⁷⁾には、父親との対決で、婚約を拒否する。

京都に留学中の李金池は、縁談で台北に呼び戻された。相手の陳鳳鶯は、台北の旧家の娘で、第三高等女学校出の教養ある女性であったが、自由恋愛による結婚を望む金池はこの話を拒否、二人は出会うことなく破談となる。

その後、金池は城隍祭で出会った洋装断髪少女楊秀恵に一目惚れし、その父文総が無頼漢に襲われたところを助けた縁で婚約・結婚に至ったが、秀恵の浪費癖と嫉妬深さ、教育の不釣り合い等による価値観の違いに気づく。金池は婚約を後悔するが、楊家と李家の間ですでに婚約が取り交わされていることから、それを解消できぬまま結婚生活に入った。いっぽう、自由恋愛による結婚は台湾では実現しないと諦めていた鳳鶯は、大稻埕の豪商郭西湖のたつての希望で、跡取り息子郭啓宗との縁談を受け入れたのだった。

だが、金池の父母と、郭西湖の乗った自動車は衝突し、彼らすべてが不慮の死を遂げてから、金池・鳳鶯のそれぞれの結婚生活は破綻に向かう。金池の父は多額の債務を残しており、その処理によって財産を失った結果、秀恵との不仲は深刻化し、金池はカフェの女給静子との恋愛にはしるものの、関係が深まる直前に思いとどまる。鳳鶯のほうは家庭内の後ろ盾であった義父を失った後は、子どもが産まれないことを理由に姑にいじめられ、また学歴の低さや仕事の能力の無さをひがむ夫のいやがらせを受けていた。静子との恋愛を清算した金池は自殺をすべく深夜家を飛び出し、同じく自らの命を絶とうとしていた鳳鶯と明治橋の上で出会う。二人は、お互いが本来婚姻の相手として相応しい相手であったことに気づきつつ、それぞれの運命を受け入れ、生き続けることを誓って別れる。

この小説は、偶然によって進展するストーリー、随所に張られた伏線、抑圧的な父親に対する金池の反抗、交わることのない金池と鳳鶯の人生、金池－秀恵、鳳鶯－郭啓宗という釣りの取れない二組の夫婦の対偶関係など、その構造はいかにも作り物然としており、また図式的である。こうした中で小説の書き手は、結婚前に妻となるべき相手との交際し、相手をよく知ることを求める金池の自由恋愛・結婚の主張とは、いささか距離を置いているように見える。

まず、金池が鳳鶯との婚約を解消した過程に注目してみる。結婚問題によって留学先から呼び戻される点では共通する『首と体』と異なり、金池は結婚の拒否をためらわない。『首と体』のSが「孝と愛」の衝突に苦悩するのは、彼の場合、「家の力」が一筋縄ではいかないこと、つまり強権的圧迫という形を取って発現するわけではないことによる。だが、帰郷時に恋愛対象が不在であった金池は、Sのような内面的衝突を生む「孝と愛」のどちらも持ち合わせず、父親興旺との単純な抑圧／被抑圧の対立に持ち込むことによって陳家との縁談を断る。だが、このことで金池が父の羈絆を脱したというわけではない。後に父の事故死によって家が崩壊してゆくことは、むしろ「父」の存在なしで家が存立することができないことを証明している。また、金池の主張に対する友人や父の批判によって、その恋愛至上主義が一貫したものでないことが明らかになる。

例えば、「内地婦人と恋愛しているのか」という友人張玉生の問いに対して、金池は「僕の家庭から見て、内地婦人を妻にすることは断然出来ない話」だと答えている。玉生は、「内地婦人」や「プロ階級」の女性を結婚の対象から除外している点で、すでに金池が「台湾の家庭の事情」に囚われている、とする。「風俗、習慣、言語、文化などは、内地やその他の外国に比して著しく低下している」台湾の、殊に中流以上の家庭に生まれたものは、「親の意志が根本で、子を親

の生産物として私有する観念」によって、「家族主義の結婚を奉じて」いる。そのような台湾で、自分のために自分の配偶者を選ぶ自由は到底認められないと嘲笑するが、金池はそれに答えることができない。

また、父興旺は、縁談の破棄を申し出た金池を詰る際、「台湾といふのは、お前の考へてゐることは、全て、実行出来ない複雑な社会なのだ」という。二人が異口同音に語るのは「台湾社会の現実」であって、金池の自由恋愛は、婚前の交際によって秀恵との性格の不一致が明らかになった時点で、この「現実」に敗北することになった。さらに、恋愛を「諦めている」鳳鶯も、同様の認識を持つ女性として描かれている。婚礼の直前、彼女は妹との会話の中で、次のように漏らしている。

「混沌として定めてゐない台湾の習慣、制度といふものをよく考へて見れば、あたし達の時代って、一番馬鹿を見ているのよ。過渡期に生まれたあたし達、どうしても面白くない生活をつづけなくちやならないと思ふのよ。」

「だって、姉さん、すでに全てを諦めたぢやなくつて？」

「勿論のこと、でなければ一日として生きて行かれないわ。でも一寸考へると、悲しいことばかりよ。殊にあたし達のやうな女に生れると、二重に辛いの」

このやりとりは、彼女の結婚後の困難や、終末での金池とのすれ違いを暗示している。最後に二人が出会う場面で、金池は二人が夫婦になっていれば「日本の軍力と中国の財源とが同盟したも同然、直ちに天下の特等国になれたんだけど……」という。読者の期待は、鳳鶯と金池の心中か、作中に登場する小島政二郎の『海燕』のごとく、二人が現在の配偶者を捨て、新しい生活を目指すことにあるかもしれなかった。だが、作者は、二人に現状に戻ることを選ばれる。その際の金池の認識は、二人が「あまり勝手すぎ」、「無理な考をして来た」というものであった。

私達は、無理に相手を同化させようとしたんです。不可能なことを要求しようとしたんです。相手が、自分と思想を異にしてゐるので、悩みを生じ苦しみを感ずて来たのは事実です。(中略) 私達は私達の欠点を見出さずに、他人の欠点のみで悩み、それで不快な生活を続けて来たんです。ねえ、生きませう。そして相手を同化する代りに、相手に同化されるやうにして楽しい生活を発見させよう。全て同情を持つて、全て善意に解釈して、相手に同化されて生きませう

父親の財産を失ったとはいえ経済的自立を得ている金池と、婚家に依存するしかない鳳鶯とは立場が大きく異なるが、金池はそのことを忖度することなく語り続ける。鳳鶯が呈した「努力しても、我慢しても、やつぱり今のやうな生活を送らねばならぬやうになれば…」という疑義は、「強く生きるんですよ」という彼の言葉に遮られてしまう。金池の言葉は、鳳鶯を確かに力づけたものの、彼女は、自分を虐待する夫や姑の家に戻らざるを得ないのだった。それにしても、ここで語られる「同化」は、「本島人が内地人になる」のではなく、彼らが台湾の伝統社

会に同化することを意味しているように見える。金池が当初語った恋愛至上主義は、あたかも「苦い思い出」のように没し去ってしまった。

4. 社会主義運動と女性解放 - 『婚約奇談』

小説の中で、自由恋愛が「人間の解放」という幸福な結末を約束し得なくなった原因は、それを最初に謳ったとされる「彼女は何処へ」にしてからが「現実」との対峙を避けていたという意味で、内部にはらまれていたものであった。しかし、家制度が揺らいだり、女性の貞操が失われることに危機感を持った保守的な人々からの根強い批判によって、自由恋愛論が守勢に回らざるを得なくなった事情が反映しているのは確かであろう。

社会主義運動の立場からの恋愛批判も、一九二〇年代半ばには文学的テキストの中に見ることができる。一九二四年に『台湾』に発表された『出さなかった手紙』¹⁸⁾ (SB生)の主人公T(作中では「私」あるいは「僕」)は社会主義運動に身を投じつつある青年で、友人Gを介し「新教育を受けたT市きっての新しい女」であるA女史姉妹と親しくなる。彼女たちの家に入り出るうち、Tは妹のMにひかれ、またGから彼女との結婚を取り持つ申し出を受けるが、貧しい彼は、裕福な家庭に育ったMに「文化生活をさせるだけの余裕がない」と言ってこれを断る。Tは台湾を離れた後もMを忘れず、彼女に恋文をしたためる。が、Tは「私共貧乏人は恋愛の自由よりは、先づ経済の自由だ」という思いを強め、また友人GがMと交際した末別れたという知らせを聞いて、Mに対する「恋慕の情」を失い、手紙を出すことはなかった。

Tにとって、Mに対する恋愛感情の解消は恋愛そのものの否定を意味する。「大衆の中に飛込むか、大衆から離れるかの境目」にある者には、恋愛は「贅沢な遊戯」であり、この恋愛に対する批判的観点は、社会主義運動の立場にある作家に引き継がれていくことになるだろう。ただ、Tの恋愛感情の意識化とその消滅がホモソーシャルな関係の中で起っていることは見逃さないほうがよいと思われる。TがMへの「恋慕の情」を自覚するのは男性どうしの会話の中であるし、また、終末部で帰台した彼が、彼のほかにMと恋愛関係にあった二人の男性と会って行く「色々面白い昔話」には、次のような会話が見られる。

「おい俺達はこれから仲良し(ママ)なければいかんよ。三角関係の仲間同志だもの。」

「三角関係じゃない。四角関係だ。」

またも笑ひ崩れた。

「出さなかった手紙」の恋愛批判は階級対立に基づくものだが、そのストーリーはMを語られる対象、あるいは揶揄の対象として他者化することに落ち着いている。それはいうまでもなく、女性を、ブルジョアの「贅沢な遊戯」としての恋愛の、贅沢さを背負う存在であると位置づけ、また、恋愛の非政治化だけでなく、女性の社会運動からの疎外を意味する。ここでは、恋愛を「人間の解放」とする発想は、階級闘争とジェンダー関係によって二重に否定されていることになる。

呂赫若¹⁹⁾の「婚約奇談」(1935)²⁰⁾は、結婚制度から逃れようとする所謂「マルクスガール」を描くものである。

春木が社会運動を行なうC市に、彼と同郷のマルクスガール琴々が訪ねてきた。彼女は、故郷から家出をし、友人瓊芳を頼る途中であったのだが、その事情というのはこうである。

没落しかけた家の三女として生まれた琴々は公学校を卒業後、進学できずに家庭にとどめられていた。琴々の明敏さと美貌を目当てに金満家たちが寄せる婚約の申し込みを、彼女は見向きもしなかった。金持ちと親しい関係を結びたい父親はこれを怒り、琴々を折檻することもあったが、「酒とカフェーに於ては特に有名」な「街の大ブルジョア」である李明和から婚約を申し込まれた際、彼女を監禁するに至る。その結果、琴々は見合いを承諾し、彼と婚約する（琴々の監禁中、春木は明和の訪問を受け、「生活の問題を真面目に考へ」たいので社会主義理論を指導してくれと頼まれ、監禁と自分が無関係であるという弁明を受ける。その真剣さに打たれた春木は明和を見直し、琴々と明和の婚約を祝福する気持ちになった）。だが婚約が決まったとたん、明和は「理論的研究」を放棄し、琴々には「所有的な横暴さを振舞」ったため、彼女は家を飛び出したのであった。

これに怒った琴々の父と明和が琴々を追跡し始める。その際、春木は、明和に琴々の居場所について詰問され、彼の「琴々との見合いを成功させるために君の本を借りて知識を得たんだ」という言葉に、「こんな男に利用されたことを恥ぢ」て小説は終わる（追記に琴々が看護婦となって自立を得たことが記されている）。

この小説でも、「恋愛」「結婚」は、「ブルジョア」とともにあるものとして否定されている。例えば、春木は、琴々を自分の下宿に迎える際、「男一人の部屋に、こうした若い女を連れ込むのは何となく変な気もする」が、それは「ブルジョアの頹廢的な恋愛気分からではなく、単に同志といふだけ」だと、自分の感情の中に「恋愛」が存在することを神経質に否定する。

琴々も恋愛を否定的に捉えている。明和を「階級的に無節操漢なのよ。やはりブルジョア的な女たらしだわ」と言う彼女は、台湾女性を「もつと自覚せねや駄目なのよ。第一インテリ女性があんなにブルジョアお嫁さんになるばかり、専念してるから可笑しいわ。本当の女性解放なんて、……………の暁になくちや不可能だと思ふわ」と評し、女性を自立・解放に導くのは社会主義だと明確に主張している。これは例えば、マルクス主義を学んだカフェの女給が雇い主や養父母の抑圧と搾取を自覚し、自立へ向けて立ち上がる劉捷の「芸娼」²¹⁾と問題意識を共有しているともいえる。が、垂水千恵氏が行ったように、琴々を説明する「マルクスガール」という言葉に揶揄を読み取り、また彼女の発言が与える「浅薄」な印象から、呂が彼女を「女性左翼の知識人として肯定的に描く意図」の有無に疑義を呈す、と言った読みも可能であろう²²⁾。

ただ、呂の批判的視線は、むしろ視点人物である春木に向けられているのかもしれない。抑圧する側と抑圧を受ける側のあいだに立つ、仲介者的な視点人物は、呂がしばしば登場させるものである。彼らの言動の特徴は、抑圧を受ける女性たちの立場に立った上での「あるべき態度」とはずれており、彼女たちや読者が期待するような問題解決の意思を明確に示すことはない。例えば、「月夜」「廟庭」といった呂の後年の佳作では、彼らは幼なじみの従妹に対する嫁ぎ先の夫や姑・小姑からの虐待を目の当たりにしながら曖昧な態度をとり続け、それは従妹を自殺未遂にまで追い詰める要因となる。

『婚約奇談』では、春木は当初明和を嫌いながら、社会主義に対する素朴な信奉から彼の改心のそぶりを真に受け、「斯る明和の態度を、罪のない感情に支配された為で、やがて理論的研究

と相俟って直るものだと解釈したかった」と、琴々が明和の態度の一変を説明しても容易に認めることをしない。「もつと冷静な態度で明和のことを考へるやう琴々に要求したい」春木が、明和を擁護するかのような発言を繰り返すのに苛立った琴々は、「あなたのは日和見ぢやないかしら」と言い、その後は彼を頼ることをしなくなる。この語り手の煮え切らなさによって、この小説は、少なくとも作者が家制度と社会主義運動を、単純な対立関係として捉えていないことを語っている。

終わりに

ここまで、「恋愛」を「個人の解放」にかかわるものとして捉え、この視点から、あるいはこれに批判的な視点から、台湾の結婚制度を問題化した、1920年から30年代にかけての小説を取り上げて概説を試みてきた。これらの小説群では「家や両親に決められた結婚を拒否する」ことが、ストーリーの中で重要な要素となっている

1922年代に書かれた「彼女は何処へ」は、恋愛が「家」や「社会」の束縛から人間を解放するものとして考えられた時期の小説である。ここでは、「恋愛」そのものが政治問題であり得た。しかしながら、この作品の登場人物や自由恋愛は、台湾社会の「現実」からおそらく意図的に隔絶され、多分に理念的であった。

1920年代後半にはこうした自由恋愛論が力を失ったため、自由恋愛を扱った後発の小説群は、多かれ少なかれ「現実の台湾社会」から恋愛至上主義を批判的に捉える、あるいは逆に、恋愛至上主義から現実を捉える視点を持っている。それらはもはや恋愛至上主義を謳歌することはできず、自由恋愛を行う登場人物達は苦悩を強いられる。また、社会主義運動の文脈では、自由恋愛や結婚はブルジョアジーの専有物とみなされ、敵視されることになった。

このように、「恋愛すること」自体が「政治的行為」であった時期は一瞬にして過ぎ去ったわけだが、そこに人間を「解放」へと導いていく可能性があったのかは検討の余地があるだろう。ただし、先述したように、台湾での自由恋愛論の起源には、宗主国から植民地への啓蒙的な恋愛論の紹介に加え、台湾から内地への欲望の眼差しが存在したことを考える必要がある。端的に言えば、台湾の自由恋愛論は植民地的状況の中で生まれてきたのだ。また、自由恋愛論を「台湾の現実」にそぐわないと否定することも、台湾が「過渡期」であるという認識を受け入れる、つまり自らを植民地化することになってしまうのではないか。

追記

本稿執筆にあたって、呉佩珍氏と藤井祐介氏のご協力を得たことを記しておく。呉氏は日本統治期の日台間の結婚を扱った小説についての質問に丁寧に応えてくださり、藤井氏には林輝煌の日本留学中の事実に関するご教示をいただいた。この場を借りて両氏に感謝申し上げたい。

注

- 1) 巫永福（1913-2008）南投埔里出身の詩人、日本語作家。中学校より日本に移り、明治大学文芸科に入学。文学を専攻して小林秀雄や横光利一の教えを受けた。33年台湾芸術研究会に参加、機関誌『フォ

- ルモサ』に作品を発表する。卒業後帰台、台湾新聞社に入社。台湾文芸聯盟に加入し『台湾文芸』に小説・試作を発表、さらに『台湾文学』の同人となる。光復後は実業家に転身した。
- 2) 『フォルモサ』創刊号 (1933年7月)
 - 3) 男児の将来の妻とするために、成年前の幼女、少女を買い、育てる中国の旧婚姻制度。
 - 4) 追風 (1902～1969)。彰化出身のジャーナリスト・政治家。中国では謝南光の筆名で知られる。本名謝春木。台北師範学校卒業後、1921年、東京高等師範学校に進学、「台湾文化協会」に参加した。25年に研究科にすすむも退学、帰台し、『台湾民報』の記者となる。27年に台湾民衆党に入党するが、これが解散せられた31年以降は大陸に渡り、抗日運動に参加。光復後、中国を支持して大陸にとどまり、全国人民代表大会常務委員などをつとめた。
 - 5) 『台湾』第三年四号・五号・六号・七号 (1922.7~10) の四回にわたり掲載。
 - 6) 張文薫「日本統治期台湾文学における『女性』イメージの機能性」『日本台湾学会報』第七号、2005年5月
 - 7) 伊藤潔『台湾』(1993年8月25日、中央公論社) 103頁
 - 8) 蘭亭主人「滑稽問答」『台湾』第三年第五号 (1922年8月)
 - 9) 呉天賞 (1909~1947) 台中生まれ。筆名に呉鬱三がある。1928年に台中師範学校を卒業後、渡日して台湾芸術研究会・台湾文芸聯盟東京支部に加入。在京中に『フォルモサ』、『台湾文芸』に作品を発表。台湾に戻り、『台湾新民報』、『興南新聞』の記者となる。光復後は『台湾新生報』の台中分社主任をつとめた。
 - 10) 『フォルモサ』創刊号 (1933年7月)
 - 11) 「恋愛と結婚の植民地主義」『文学の植民地主義 - 近代朝鮮の風景と記憶 - 』(2006年1月20日、世界思想社) 34頁
 - 12) 『台湾文芸』第二巻第十号 (1935年9月)
 - 13) 『文芸台湾』第一巻三号 (1940年5月)
 - 14) 『台湾文芸』第二巻八・九合併号 (1935年8月)
 - 15) 洪郁如『近代台湾女性史』(2001年11月20日、勁草書房) 45,46p
 - 16) 林輝焜 (1902~?) 淡水生まれ。国語学校国語部から京都第二中、金沢第四高等学校を経て京都帝大経済学部(河上肇の門下にいたか)を卒業、帰台。1930年、淡水信用組合の専務理事となる。光復後台北市長となる呉三連とは友人であり、『争へぬ運命』は、1932年当時『台湾新民報』の編集部にはいた呉のすすめによって、同紙に執筆したものであった。この後、文学作品を発表することなく、主に金融業界で働いたようである。光復後は呉三連の秘書を経て、彰化銀行に入行。
 - 17) 「台湾初の長編新聞小説」として、『台湾新民報』に連載 (1932年7月～1933年3月) 単行本は、1933年4月に私家版として出版された。
 - 18) 『台湾』第五年第二号、一九二四年
 - 19) 呂赫若 (1914~1951) 台中県出身。台中師範学校卒業後、公学校で教鞭をとりながら執筆を行い、1935年1月に日本の『文学評論』に発表した「牛車」で文名を上げる。その後、『台湾文芸』や『台湾民報』などに作品を発表。39年に渡日、武蔵野音楽学校声楽科に入り、同時に東宝劇団で歌劇に出演。42年帰台後、張文環の『台湾文学』同人となり、『興南新聞』に入社する。戦争期は『台湾文学』のほか、『台湾公論』、『台湾時報』などに次々と佳作を発表し、この時期を代表する日本語作家の一人となる。光復後は『人民導報』記者、中学校の音楽教師などをつとめつつ、中国語で創作を行う。1947年の228事件後は台湾共産党で地下活動に従事したが、51年に台北県石碇郷鹿窟で毒蛇に咬まれて死去したと言われている。
 - 20) 『台湾文芸』第二巻第七号 (1935年7月)
 - 21) 『台湾文芸』第三巻第二号 (1936年1月)
 - 22) 『呂赫若研究』(風間書房2002年2月15日) 95,96頁